ヨシクマ新聞

ノクマ新聞　日刊（月極1,900円）日曜祝日翌日休刊　平成26年（2014年）10月11日　土曜日

歴史学び見聞広げる

入鹿中　英国人と交流授業

熊野市入鹿中学校で9日、生徒と元英国人戦友会「イルカボーイズ」関係者との交流会が開かれた。

紀和町には第2次世界大戦中に日本の捕虜となり、旧入鹿村（現・熊野市紀和町）の紀州鉱山に送られ、病死した16人の英国兵が眠っている。同町では老人会の人たちが墓地を守り英国人捕虜の供養を続けており、同町出身の恵子・ホームズさんらの心の癒やしと和解の旅の活動や、紀南国際交流会による追悼式など、日英の架け橋となる取り組みが広がっている。

【ウイリアムさん（左）の話を通訳し伝える恵子・ホームズさん】

この日は恵子・ホームズさんと、義理の父が捕虜だったジョン・スミスさんや、ジャワ島で日本軍の捕虜だった93才のウイリアム・マンディさんら4人の英国人が同中を訪問。同中でイルカボーイズの特別授業などを行った地元の小瀬功さんら4人も同席した。

【捕虜生活の体験談などに耳を傾ける入鹿中の生徒】

全校生徒18人を前に、恵子・ホームズさんが「300人いた捕虜の内、16人が亡くなった。地元の老人会の方が遺骨を一つにまとめ、新しいお墓を作り、お世話してきた。私はすごく感動して活動を始めました。紀南国際交流会も助けてくれて、活動が増えていった」と説明した。

続いて、ウイリアムさんが当時の戦争を振り返り、捕虜生活などを語った。恵子・ホームズさんが通訳。捕虜としての船での移動中は日光を浴びられたのは1日に1回、僅かな時間だけ。インドネシアでは飲水のない状態で朝8時から夜6時まで労働があり、体を壊したそうだ。ウイリアムさんは「暗いトンネルの苦しい捕虜生活の中でも、私にとっては真っ暗でなかった」と、イエス・キリストへの信仰が光明となったことも話した。

また、ジョンさんによると、イルカボーイズの義父は最初、捕虜のことは何も話さなかった。しかし、恵子さんらの活動で日本を訪れ素晴らしい経験をし、苦々しい思いや痛み、恨みから開放され「過去を振り返らず、前向きに進むことが出来た。熊野に来たことが人生で一番良かった」と言っていたという。

この後、生徒たちは英語やイギリスの生活などについて質問。恵子・ホームズさんは生徒たちに「外に目を向けて」とメッセージを送っていた。

なお、11日午前10時からは紀和の英国人墓地で追悼式が行われる。